

「村役場日誌」のおもしろさ

今村 直樹



おそらく近代資料の整理・調査経験を有する方の多くが、一度は目にしたことがあるもの。それは、明治期以降の村・町役場資料である。熊本県で過ごした大学院時代、筆者が重点的に調査を行っていたのもまた村役場資料であり、その存在は、私に資料調査の醍醐味や楽しさを教えてくれた。以下、私がおもしろいと思う村役場資料の魅力の一端について、「村役場日誌」を事例に紹介してみたい。

大学院時代、とくに私が足しげく資料調査に通っていたのは、大分県との県境である阿蘇郡小国町の教育委員会が所有していた、旧北小国村役場資料であった。総点数 2000 点に及ぶこの資料群の特色の一つは、明治 20 年代の町村制施行から昭和期までの行政文書はもちろんのこと、合併以前の近世村のそれも明治維新直後から豊富に残されている点である。なかでも、同役場資料のなかで、明治初期の「大区小区制」期から、昭和期までほぼ毎年残存している「村役場日誌」は、近代地域行政の展開を長いスパンで具体的に跡づける観点からも、非常に重要な資料だといえる。

日誌では、当日の宿直が日替わりでその日の業務や出来事、あるいは個人的な雑感などを記している。例えば、明治 26 年 (1893) 9 月、北小国村では赤痢が大流行して多数の死者を出すなどの被害があり、翌 27 年にも再び赤痢が発生した。日清戦争の開戦間近である同年 6 月 26 日の日誌には、町内で「大消毒」が行われたという業務報告に続き、「赤痢將軍ノ進撃、役場員ノ防戦」という文章が綴られている。

2007年4月 日本学術振興会特別研究員 (DC2)

2011年4月 熊本大学文学部附属永青文庫研究センター特定事業研究員

2012年4月 静岡大学人文社会科学部准教授
【研究テーマ】

18-19世紀日本の地域社会と民衆運動の研究
【現在やっていること】

- ・近世後期熊本藩領における地域行政機構の研究
- ・幕末維新期における伊豆蕪山代官江川家の研究

そこには、昨年からの赤痢被害と役場による予防・消毒の取り組みが振り返られ、本日の役場員の「防衛」が功を奏し、「赤痢將軍」が撲滅されたという「勝利宣言」が記されている。対外的な緊張が高まるなか、赤痢対策に従事した役場吏員の興奮ぶりが伝わってくる文章であるが、実際には赤痢の猛威は衰えることなく、4 日後には町内で新たに二名の患者が出ている。

また、明治 23 年 7 月 1 日、北小国村で初めて衆議院議員選挙が実施された当日の日誌には、待ちに待った国政選挙を担当者として滞りなく遂行できたこと、業務終了後にその安堵感から「茫然」とし、その日は、投票箱を枕のもとに引き寄せて眠ってしまったと記されている (なお、何の夢も見なかったらしい)。

このように「村役場日誌」は、近代国家の形成過程における時代の雰囲気や、具体的な地域運営に携わった人びとの言葉を通じて今に伝えてくれる資料であり、ゆえにこれからもっと活用していきたいと個人的に思う。

2013年4月20日、世田谷区川村家文書保存・調査活動において、扁額・画帖とともに桐箱に収められた卷子5巻が発見された。うち4巻は、近世後期の儒者・猪飼敬所の書状を集めて巻装したもので、書状の総数は100通近くにのぼる。当史料を伝えた川村家は、津藩の儒学者川村竹坡の子孫にあたり、書状はいずれも敬所が竹坡に宛てたものである。竹坡は寛政9年(1797)伊勢に生まれ、名は尚迪、字は毅甫、著作に『竹坡詩文集』がある。書簡からは両者の交流や藩校の運営、上方周辺の儒学者の動静が事細やかに伝わってくる。

例えばそのうちの一通、8月11日付の書状がある。文中、大地震が話題にのぼることから、これが文政13年(天保元・1830)7月の京阪文政地震直後に認められたことが分かる。

書状の本題は、墓の「碑面」に関する質問への回答である。竹坡の亡父川村閑齋の墓石にふさわしい碑文は何か。敬所は、家内に置く位牌と異なり、墓碑は外に建てるので姓を書くこと、津藩には「尊貴の方」も多く、外に建てる物に「君」と書くのは憚られるから「川村閑齋居士墓」が適切であろうと、中国の故例を引いて説く。そして、高齢の閑齋の病状をかねてから心配していたこと、凶報に接した経緯と弔意を述べている。

差出人の敬所は、竹坡の師であった。猪飼敬所は、京都で生まれ、商業の傍ら儒学を修めた。頼山陽と親しく、書物の正誤に厳しいことで知られた。一方竹坡は、詩を地元で津阪東陽に学んだ竹坡は、文政3年(1820)藩学創立時に習書添役を命じられ、翌年家督を嗣いだ。そして文政10年正月、上京して猪飼敬所に入門、儒学を学ぶ傍ら、頼山陽にも詩文を学んだ。翌年帰郷して藩校有造館で教鞭を執り、のちに督学の地位に就いた。

この書状は入門後3年を経た年、敬所70才、竹坡34才の時のものである。享年78才で没した竹坡

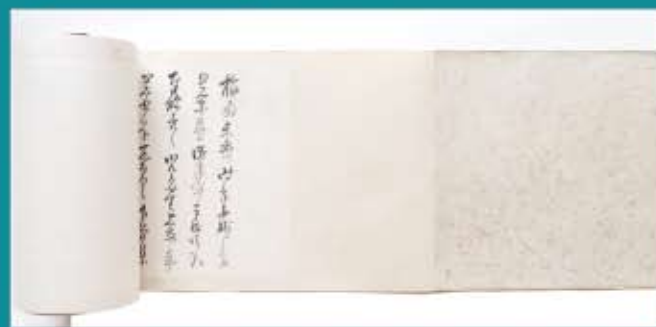
の父閑齋は、津藩の郡方手代として治水政策に功績を挙げ、郷代官格に抜擢された人物であった。しかし、下士からめざましい出世を遂げた閑齋は、時に讒言も受けたようである。父への孝養を顕そうとする竹坡の思いを汲みつつ、奇を衒うことを諫め、彼らの立場を斟酌して抑制された文面を提案する、具体的かつ親身な提言が目を引く。

竹坡宛書状で既に自らの老を嘆いた敬所であったが、この後も長く交流を続け、晩年招かれて津に移り、弘化2年(1845)に85才で没するまでを過ごす。勿論、彼を招いたのが竹坡その人である。竹坡は実子の無かった敬所に養子を周旋し、後事を看取った。(津市教育会刊行『川村竹坡先生伝』1925年)冒頭の書状に、生父と別れた竹坡に対し、敬所が父代わりともいふべき立場となる端緒を読み取るのは、過ぎた穿鑿だろうか。

これらの書簡は、近世後期の思想・文化を考える上で貴重なものであると思われ、NPO内外の近世史研究者らが分担して翻刻を行った。今後史料集として刊行予定である。



← 桐箱に収められた状態。左は蓋を取ったところ。



2010年松戸市戸定歴史館より調査依頼を受け、我孫子市安島家文書の調査・整理が開始された。調査・整理のひと段落がついた2012年3月には「幕末維新の世界へようこそ」というタイトルで報告会を開催した。「幕末維新」というタイトルの通り、安島家は水戸藩の家老を務め、戊午の密勅に深く関与した安島帯刀信立の子孫に当たるお宅である。古文書・刊本・軸・写真など合わせて総点数256点の近世から近代にかけての資料が残されている。その内の多くが信立の娘・道子と立子に関するものである。詳しくは、『じゃんびん』Vol.9~11を参照されたい。安島家文書には政治性をうかがわせるような史料はあまりないが、信立が水戸徳川家の家老、また娘たちが徳川斉昭の妻（貞芳院）に仕えていたということから、水戸徳川家に関する物がいくつか見られる。

道子の経歴がわかるものに、安政5年（1858）の史料がある（No.1-30）。包紙内書に後筆で「安政五年の年四月廿八日貞芳院様の御側にて名ヲ萬寿江拝領、一ツ橋殿へ上り峯トなり、御側へ御奉公の身となり、道と拝領セシ也」とある。道子は始め水戸徳川家の奥向きに仕え、その後一橋徳川家に奉公したということだが、当時一橋徳川家の当主は水戸斉昭の七男慶喜が当主となり、この頃將軍継嗣問題が起っていた時期である。残念ながらこれ以上のことは史料からはうかがえないが、この時期に水戸徳川

家から一橋徳川家に、水戸徳川家の有力家臣の娘が移動していたことが分かる。

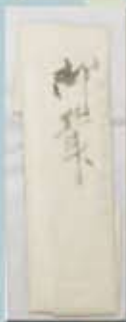
また、水戸徳川家と関わる史料で、斉昭の十八男で清水徳川家の当主となった後、最後の水戸藩主となった徳川昭武の母・万里小路睦子（秋庭）からの書状がある（No.1-67）。封筒上書に「おみち殿御返事 秋庭」とあり、睦子から直筆のものである。

また、昭武と貞芳院が写った写真も残されており、道子が水戸徳川家を退いた後も水戸徳川家と交流があったことがうかがえる。

安島家文書を紐解いていくと、水戸徳川家と「安島家」がどう関わりがあったのか新たに覚えてこよう。今後は、安島家文書の画像公開なども期待される。



↑ 昭武・登美子写真



↑ 道子が名前を拝領
(1-30)
← 1-30の包紙

活動報告

- 8月15日 ニュースレター『じゃんびん』vol.17刊行
- 10月9日 東洋美術学校にて講義
- 11月15日 台東区市田邸文書保存・調査活動
- 11月17日 西多摩市民講座（西村慎太郎「歴史と文化が失われる日ー歴史資料の散逸、奥多摩・小河内ー」）
- 11月20日 長野県史料保存活用講習会報告（西村慎太郎「地域歴史資料保全の現状と課題」）
- 11月22日 『南伊豆を知ろう会』vol.1刊行
- 11月22日 「第7回南伊豆を知ろう会」開催
- 11月23~24日 静岡県南伊豆町渡辺家文書保存・調査活動
- 11月25日 静岡県南伊豆町伊浜地区所在調査

- 11月26日 声明文「神城断層地震（長野県北部地震）に伴う歴史資料保全について（お願い）」発表
- 11月28日 昭和のくらし博物館所蔵資料保存・調査活動打ち合わせ
- 12月11日 台東区市田邸文書保存・調査活動打ち合わせ
- 12月27日 調布市佐橋家文書保存・調査活動
- 12月28日 昭和のくらし博物館所蔵資料保存・調査活動打ち合わせ
- 1月23日 東洋美術学校にて講義・修復文書の提供
- 1月24日 第14回例会開催
- 2月2日 台東区市田邸文書保存・調査活動

その他、毎週水曜日に茨城資料ネットの活動に協力

杉並区蒲生家文書保存・調査活動についてはすでに『じゃんびん』vol.16（2014年4月1日発行）に記しているとおり、江戸時代段階では飛騨高山の商家で、明治維新後、各地で判事を務めた蒲生俊孝、俊孝の息子には安全運動を推進した蒲生俊文や早世の画家である蒲生俊武を輩出した家です。とりわけ蒲生俊文については近現代史研究者の堀口良一近畿大学教授による研究としても著名です（『安全第一の誕生 ー安全運動の社会史』不二出版、2011年など）。

2014年8月の作業によって、目録作成と写真撮影の作業はほとんど終了しました。当初より作業を行わないとしていた8点のボックス・ケース（主に戦後のはがきや所蔵資料に関するコピー、他家の資料、アルバム）についても貴重な歴史資料であるため、御所蔵者の了解を頂き、概要調査のみを行なうことに致しました。概要調査の理念と方法論についてはすでに高橋実氏が『牛久市小坂・斎藤家文書概要調査報告書』（牛久市、1993年）で述べているように、歴史資料の現状（遺された状態）を把握して、今後の作業の計画を立てる整理段階の最初の作業です。近年では、大規模自然災害時の文化財レスキュー作業の現場でも導入されています（拙稿「概要調査・現状記録再考」『国文学研究資料館紀要アーカイブズ研究篇』9、2013年）。

当会では写真のような「概要調査記録用紙」1・2を用いました。蒲生家文書に則してその方法を述べますと、①ボックスケースを真上から見た写真を撮影し、同様にスケッチを描きます（このあたりは現状記録と変わりありません）。②ボックス内のまとまりごとに収納状況などを摘記していくということになります。概要調査では、何が、どの程度、どのように入っていたかの概要が把握できれば十分です。

（2014年8月8日作業従事者：武子裕美・千葉かおり・西村慎太郎・南隆哲）

← 概要調査記録用紙 1

概要調査記録用紙 2

神城断層地震（長野県北部地震）に伴う歴史資料保全について（お願い）

2014年11月26日
2014年11月22日に長野県北部で最大震度6弱を記録する地震が発生致しました。被災された皆様に心より御見舞い申し上げます。

今回の地震では多くの地域で建物の損壊が報告されております。そして、歴史資料（写真・民具・文書など）の被害が懸念されます。もし雪や雨などによって水に濡れてしまい、カビが生えてしまったような場合でも、ある程度の復元が可能ですので当会に御相談ください。地元自治体と相談の上、当会では歴史資料の救済のために全力でサポート致します。

また、何か身の回りの歴史資料で問題が起きていないでしょうか。問題が発生している、あるいは歴史的な資料に関する質問や意見、保存に対する対処方法、今後の保存に関する不安など、御困りのことがございましたら、NPO法人歴史資料継承機構までお気軽に御連絡頂ければ幸いです。